

西洋入浴図考(上)

Bathing Scenes in Western Art (part one)

保井 亜弓
YASUI Ayumi

はじめに

日本人は風呂好きだと言われる¹。湯船に浸かって一日の疲れを癒すのは、最高のリラックスタイムであるかもしれない。また、温泉巡りを好む人も多い。病気治療のための湯治は、洋の東西を問わず昔から行われていた。しかし、たとえばヨーロッパでは、たとえ家にバスタブがあっても必ずしも毎日湯をためて入浴するわけではなく、シャワーで済ませることが多いようだ。いや、西洋にも古代ローマのテルマエのように大浴場があったのではないか。ヤマザキ・マリの『テルマエ・ロマエ』²が流行ったのは少し前のことであるが、そこではいずれも風呂好きの古代ローマ人と日本人の風呂にまつわる文化が比較されていた。

そもそも入浴とは人間に必要なものなのだろうか。食べることは生きるために必要だが、入浴しなくても死ぬわけではない。実際風呂にほとんど、あるいはまったく入らない民族もいるという³。風呂に入らないとはなんと不潔なことか、と思われるかもしれないが、夏には高温多湿となる日本とは異なり、乾燥していればそれほど気にならないというわけである。

入浴には、このように身体を清潔にまた健康に保つという役割があるが、それは同時に水による浄化も意味する。水のシンボリズムはきわめて多義的であり、水を浴びるという行為は、しばしば婚礼や葬礼時に行われ、あるいは身体だけでなく精神も浄めるという意味を持つように、通過儀礼や宗教儀礼ともなる。すなわち、入浴ないしは沐浴は、きわめて

日常かつプライベートな行為である一方で、儀式的あるいは象徴的なものでもある。本稿では、このような入浴の歴史を概観するとともに、とくにヨーロッパにおける入浴の表象における問題点をいくつか取り上げる。なおここで、入浴というのは、熱気浴(蒸し風呂)、温水浴、冷水浴を指し、また人工的な風呂ばかりでなく、天然の温泉はいうまでもなく、泉、川、海などに入る行為も範疇に入れる。

1. 風呂の概略史—ヨーロッパを中心に

1-1. 東方起源と古代ギリシア・ローマ

人間が池、泉、川あるいは温泉で水浴、温浴をしていたことは想像がつくがそれをいつからとさかのぼることは難しく、世界の入浴文化史を著わした吉田も山内もアメリカ大陸から始めているが、本論ではそれはあまりに広範囲にわたるため、ヨーロッパを中心に考えていくことにする。先に、人工的な風呂として蒸し風呂、温水浴、冷水浴があると記したが、それらの中では蒸し風呂が歴史的に早く誕生したとされる。これは日本における風呂の歴史も同じである。ユーラシア大陸では、北欧に現代のロシアで「バニア」、フィンランドで「サウナ」と呼ばれる蒸し風呂があった、この地域の文化は北米とも地勢的に繋がっている。

一方、地中海地方に目を向けると、メソポタミアの紀元前4000年末頃のシュメール人の都市ウルクにある神殿の遺跡に給排水施設をもった沐浴室がある。沐浴室は神殿入り口と内部の中間にあるため、宗教的な儀礼の「浄め」のために沐浴が行われてい

たとえられている。また、世俗的な王宮では、紀元前3000年頃のエシュメンナ宮殿遺跡に、沐浴室にトイレが併設されているものがあり、より実用的なものが存在していたことがわかる。古代インド、古代エジプトにも風呂の遺構は存在する。紀元前1800年から1450年頃のクレタ島、クノッソス宮殿の女王の部屋にはテラコッタ製の浴槽があり、隣室には水洗トイレが設けられていた。クレタ島ではこうした王宮ばかりでなく、隊商宿に足を洗う浴槽があり、そこには水だけでなく、湯が張られていた形跡もあるという。

このように古代ギリシアの風呂の文化は東方から由来したと考えられるが、そこでは新たな発展がみられた。古代ギリシアの風呂には二つの系譜があり、ひとつが「バラネイオン」、もうひとつが「ギュムナシオン」である。バラネイオンは個人用のバスタブで、座って腰まで浸かるヒップ・バスである。後にヨーロッパに現れるヒップ・バスとは別物である。足元に排水溝があり、座った人に水を注ぎかけた。共同浴場では、このバラネイオンが方形あるいは円形の部屋の壁沿いに並べられた。もう一方のギュムナシオンは鍛錬と競技の場であった。古代ギリシア人は心身の健康を重視しスポーツが奨励された。ギュムナシオン *γυμνάσιον* というギリシア語は「裸の *γυμνός*」という語から派生しており、オリンピックではないが、古代の男たちは裸で競技したのである。そして運動の後に汗を流すために水浴したのだが、それは引かれた水が上部から出るような仕組みになっていて、シャワーの原型といえる。冷水が使われていたギュムナシオンに、後に熱気浴すなわち蒸し風呂が加えられ、それが共同風呂にも導入されるようになり「バラネイオン *βαλανείον*」となる。共同風呂の女性たちはというと、全裸ではなく腰巻をつけていた⁴。ギュムナシオンでもともと冷水浴が行われていたことと「男らしさ」は結びついており、その名残は現代ドイツ語の「暖かいシャワーを浴びる奴 *Warmduscher*」が「いくじなし、女々しい奴」を意味することからもわかる⁵。

古代ローマ人たちはギリシア人の風呂の文化を受

け継いだ。彼らも、古くは「ラヴァトリオ *lavatorio*」と呼ばれる台所に併設された冷水浴の部屋を使用していた。それに加えてギリシア人の「バラネイオン」が伝わり、「バルネア *balnea*」と呼ばれた。バルネアはさらに発展して全身浴、床下暖房、蒸し風呂というように風呂の種類が増えていき、浴場は鍛錬の場から娯楽の場へと変貌して、いわゆる「テルマエ *thermae*」が紀元前1世紀頃に成立した⁶。テルマエはどんどん贅を尽くしたものになっていき、皇帝たちは帝位につくと競うように豪華なテルマエを作った。そこには浴場のほかにプール、運動公園、庭園、図書館、会議室などがあり、近くには飲食店が立ち並び、両性の売春宿もあったらしい。世界遺産となっているカラカラ帝浴場遺跡⁷ (212年-216年) (図1) は有名であるが、敷地面積でそれに並ぶ306年に



図1 カラカラ帝浴場、212年-216年



図2 ディオクレティアヌス帝浴場復元模型、ローマ文明博物館

完成したディオクレティアヌス帝浴場はローマ帝国最大かつ最も豪華な建物であった(図2)。その建物は1561年にミケランジェロが浴場部分を改築してサンタ・マリア・デッリ・アンジェリ・エ・マルティエリ聖堂とした。残りの部分は、現在ローマ国立博物館の一部とサン・ベルナルド・アッレ・テルメ聖堂となっている。

古代ローマ人の風呂の入り方は、基本的に冷・暖・熱・暖・冷とだんだんと温めてまた冷ましていくものだった。まず着替え部屋で服を脱いで、「冷気室 frigidarium」へ行き、そこから「暖温室 tepidarium」でオイルを塗る。そして「高温室 cardarium」に入り汗が出たら、垢を擦り取ってもらう。そこには浴槽もあり、浴槽へも浸かる。高温室と温暖室の間にはしばしば熱気浴室があった。その後温暖室に入り乾燥を防ぐためにまたオイルを塗り、冷気室に戻る。

ところで、現代のように石鹸で体を洗うということを古代ギリシア人もローマ人もしなかった。彼らはオイルを塗ってストリギリスという道具で垢を擦り落としていた。石鹸は動物の脂と灰を混ぜて作られ、紀元前2000年頃のバビロニアで作られていた形跡があるものの、何を洗っていたのかはわからない。古代エジプトでは植物由来の油を使った石鹸で体を洗っていたようである。ヨーロッパでは長く動物の脂と灰を混ぜて石鹸が作られ、それは体を洗うには刺激が強すぎ、やがて中世にオリヴオイルで石鹸が作られるようになるが、かなりの贅沢品であった⁸。

古代ローマ人の末期の浴場形式は、今度は逆に東方のイスラームへと影響を及ぼし、当地で「ハムマーム」⁹という蒸し風呂が成立する。これは熱くないサウナのようなもので、トルコ人の多いドイツでは現在でもよく見かける。

1-2. 中世の禁欲から共同浴場と宮廷浴場へ

西ローマ帝国が476年に崩壊し、中世の時代になると、キリスト教的な禁欲主義のために入浴は一時廃れることになる¹⁰。キリスト教においては、精神が重要であり、肉体は下位に位置付けられた。また

ローマ人が好んだ入浴は、異教的だとされた。中世の聖人には、風呂にほとんどあるいは全く入らない者がおり、その貧しさが尊ばれた。宗教儀礼としてのキリスト教の洗礼は、ユダヤ教から受け継いだもので、もともとは全身洗礼であったが、7世紀には現代でも行われているような頭部への洗礼に大方が変わった。福音書では、イエスや弟子たちが不浄に対して無頓着であるような記述がみられ、それは信者たちにも影響を与えた¹¹。

イスラームのハムマームは、イベリア半島に入ってきたとはいえ、それは異教徒のものともみなされていた。ところが、ハムマームは結局十字軍によってヨーロッパにもたらされた。入浴の習慣は、古代ローマ起源のイスラームのハムマームが十字軍によって見いだされたことで、ヨーロッパで再び復活するきっかけとなる。

とはいえ、中世に入浴の習慣がなかったわけではない。すでにカロリング朝時代に、カール大帝はアーヘンを温泉の町として、自らの痛風を癒すために入浴を好んだという。そして、7、8世紀になると修道院や一部の聖堂にも共同浴場や蒸し風呂部屋が付設されていた¹²。ヨーロッパで作られた浴場は、ハムマームのような蒸し風呂から、古代ローマ時代の浴場を修復したもの、あるいは温泉が湧くところに作られたものもあった¹³。都市部でも共同浴場はまたたく間に広まり、14世紀にはロンドンに少なくとも18の浴場があった。1292年のパリには26の浴場がありギルドが結成されていた。ドイツ語圏では、十字軍以前にすでにロシアから伝えられた蒸し風呂が存在していた¹⁴。南ドイツはとりわけ浴場が多いことで知られる¹⁵。

15世紀ドイツの温泉地での入浴の様子を伝える文献としては、イタリア人の人文主義者ポッジョ・ブラッチョリーニがフィレンツェの友人に宛てた手紙がよく知られている¹⁶。ポッジョは、各地で古典書を探し回り、1417年にルクレティウスの『事物の本質について』の写本を発見した人物である。その発見の前年に彼は湯治のためにバーデンの有名な温泉地を訪れた。そしてそこで男女がほとんど裸で混浴

する光景を見て驚愕したのである。彼自身は風呂に入らず、上の回廊からそれを眺めたという。アダムとエヴァを彷彿とさせるような、恥じらいのない浴場の光景を詳細に友人に書き綴った後で「いくつかの例を見ればわかるだろう。ここがエピクロスの思考の偉大なる中心地である」と記している。ドイツでも男女別の浴場があったものの、混浴はしばしば行われていた。ポッジョの驚きようから察するにイタリアでは規律正しく分かれていたのだろう。いずれにせよ、彼がここにキリスト教的な規則にも束縛されない古代の精神さえ見出していたのは興味深い。バーデンの共同浴場を描いた16世紀の木版画挿絵は、ポッジョが眺めたであろう浴場を彷彿とさせる(図3)。風呂の中には抱き合う男女や、杖をついた病人と思しき人がいて、周りには風呂を囲う塀から入浴者たちを眺める人々の姿も見える。



図3 バーデンの共同浴場、木版画挿絵、1548年

16世紀に入ると、ペストなどの疫病の流行、木材の高騰、道徳を重んじるプロテスタントの思想などにより、こうした共同浴場は次々に閉鎖されることになる。完全になくなったわけではなく、地方によってはペストが収まれば開業していたところもあり、また温泉地の湯治などは行われていたとはいえ、

街に共同浴場があふれた時代には終止符が打たれた。

人々に開かれた共同浴場の対極にあるのが、高位の聖職者や王侯貴族がその宮殿に持っていた豪華な浴室である¹⁷。ラファエッロとその工房が装飾を手掛けた、ヴァチカンの枢機卿ベルナルド・ビッビエーナの居室にあった浴室stufettaや今に残るカルテル・サントアンジェロの教皇クレメンス7世の浴室stufettaはよく知られている。そうした中でもフランス王フランソワ1世が中世以来の古城を改築して1528年に建造したフォンテーヌブロー宮殿内にあったという「浴室の間appartement des bains」(1534年建造)は、1697年には取り壊され現存はしないものの当時はとりわけ有名だった¹⁸。パリから50キロメートルほど離れたフォンテーヌブロー宮殿は、歴代フランス王の宮殿の中でも最大級であり、ヴァザーリはその壮麗さを「第二のローマ」と讃えている。

〈フランソワ1世のギャラリー〉(装飾1533-1539年)の階下に設えられた「浴室の間」は、7部屋で構成されていた(図4)。第1の間(図の番号に対応)は「高温な熱気浴室étuves chaudes」でストーヴによる床下暖房となっていた。第2の間では「暖温な熱気浴室étuves tièdes」であり湯を汲むことができ、第3の間は「浴室bain」で掘られた浴槽(縦4.57メートル、横3.26メートル、深さ1.14メートル)があった。第4と第5の間は「休息の間chambre de repos」であり、第5の間にはふたつの小部屋が付いていた。

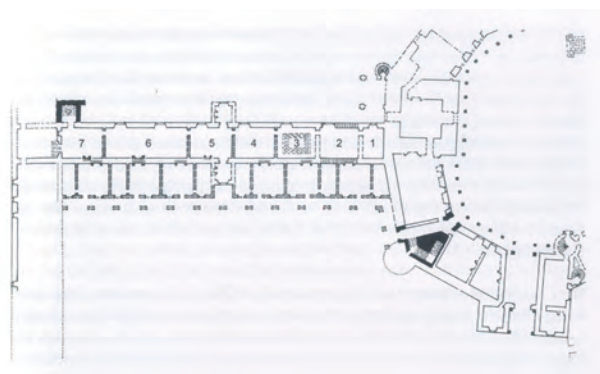


図4 フォンテーヌブロー宮殿「浴室の間」復元図(番号はエヒンガー=マウラッハによる)

ひととき大きな第6の間は「広間 grande salle」であり、アンリ4世の時代には「会議の間 chambre de conseil」と呼ばれた。第7の部屋は「玄関の間 vestibule」である。

驚くべきは第7の間を除く各部屋に美術品が置かれていたらしいということである。彫刻ならまだしも、絵画までも置かれていた。もっとも第1、第2の間の絵画は湿気により損傷したので、後にコピーに置き換えられたという。そうした絵画には、現在ルーヴル美術館が誇る、レオナルド、ラファエロ、ティツィアーノをはじめとする名画の数々が含まれていた。

フォンテーヌブロー宮殿の装飾はフランソワ1世がイタリアから呼び寄せた画家ロッソ・フィオーレンティーノとフランチェスコ・プリマッチョの指揮の下で行われたが、この「浴室の間」も〈フランソワ1世のギャラリー〉と同様に浴室を除く4部屋はプリマッチョによるフレスコ画やストゥッコなどで華麗に飾られていた。

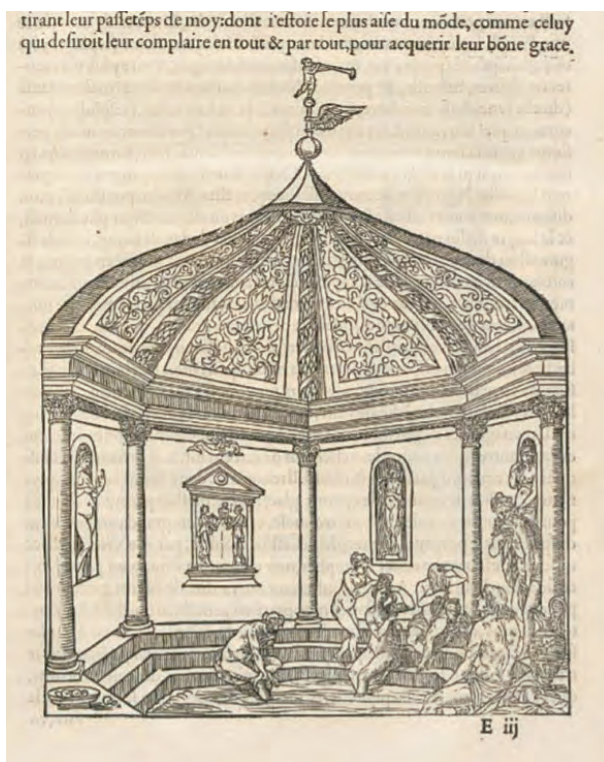


図5 ジャン・クーザン(父)(下絵)、《五感に囲まれるポリフィロ》、木版挿絵、1546年



図6 ジャン・ミニヨン彫版、ルカ・ペンニ(下絵)、《入浴する女性たち》、エッチング

ではフランソワ1世の豪華な「浴室の間」での入浴とはどのようなものだったのだろうか。ある時フランス王とイタリアの聖職者たちはフォンテーヌブロー宮殿の「浴室の間」を巡り、王の愛妾であるエタンブ公爵夫人アンヌ・ド・ピスルーや裸の女性たちと入浴しながら語り合った。愛妾だけがこのような場にいたのではない。またある時は王の姉であり、人文主義と改革主義者の擁護者で、自らも著作をものしたマルグリット・ド・ナヴァルが同様に入浴した¹⁹。浴室では音楽が奏でられ、飲食もしたであろう。浴室は五感のすべてに作用し、心身ともにリラックスした社交の場でもあったに違いない。

1546年に出されたフランチェスコ・コロナナの『愛の戦いの夢、あるいはポリフィロの夢』フランス語版(ジャン・マルタン訳、イタリア語原書は1499年刊)には、編者ジャン・ケルヴェによってオリジナルにはない2枚の挿絵が加えられていた²⁰。それは浴場の外観と内部の図であり、後者では、五感の寓意像である入浴する女性たちを前にして、ポリフィロが手前に座っている。この書の出版はフランソワ1世の存命中であり、王にも仕えたジャン・クーザンの下絵によるこの挿絵がわざわざ加えられたことは、世に名高い「浴室の間」を誇示するものだったのかもしれない。入浴を描くフォンテーヌブロー派の版画としては、ジャン・ミニヨンによるエッチングの《入浴する女性たち》があり、これはルカ・ペン

二の下絵によるものなので「浴室の間」の装飾を版画化したものではない²¹。とはいえ、裸体の女性たちがさまざまなポーズで、梳ったり、湯に浸かったり、鏡を見たりして寛いでおり、湯男と思しき男が食べ物や飲み物を運んできて、飲食の楽しみも暗示されている。「入浴の間」での入浴の情景とはまさにこのようなものだったのではないだろうか。

1-3. 入浴を嫌悪する時代

ペストで共同浴場が閉鎖されたのは、入浴により熱と水で皮膚の毛穴が広がり、そこから悪疫が入ると信じられていたからである。1348年に王命でペストの原因を調査したパリ大学の医学部教授もそのような報告をしていたし、1568年のフランス王室付き外科医アンブロワーズ・パレも同様の見解を示していた²²。16世紀半ばから18世紀半ばまで、人々は入浴を恐れ、避け続けることになる。

王侯貴族もこれらの迷信から次第にほとんど入浴しなくなった。フランス王アンリ4世(在位1589-1610年)は、その愛妾ド・ヴェルヌイユ侯爵夫人から「夫は腐った肉のように臭い」と言われるほどの体臭のひどさで知られていたし、貴族たちの間では体臭を隠す香水や口臭を消すボンボンが流行した²³。息子ルイ王太子(後のルイ13世)は、王室の記録によれば、1601年に生まれて5歳になってようやくぬるい湯で足を洗い、産湯に浸かったのはなんと7歳のときであった²⁴。このように体を洗うことなく、どのように清潔を保つのかというと、それは下着を替えることだった。清潔な亜麻布が清潔さを保ってくれると信じられていた。

一方で、療養のために温泉地で湯治することは行われていた。16世紀末の温泉地の様子は、ミシェル・ド・モンテーニュの『旅行日記』から知ることができる²⁵。モンテーニュは、1577年に腎臓結石痙痛の発作を初めて起こして以来、神経痛あるいはリュウマチとともにこの病に苦しめられた。元来旅行好きのモンテーニュは、腎臓結石の発作を起こしてからはフランス国内のバルボタンやプレシャックの温泉地を訪れていた。ローマを目指した17か月に

もおよぶ旅行は彼にとっての初めての外国旅行であった。1580年9月5日にボーモンの自宅を出発したその旅行の目的は政治的なものだったが、湯治もむろん重要であった。まずロレーヌとドイツの境の谷間にある温泉地プロンビエール²⁶、そしてスイスのバーデン、イタリアではピサに小さな温泉(サン・ジュリアーノ温泉)を見つけ、その後にルッカからデラ・ヴィッラを2度訪れている。各地の温泉地での飲泉や入浴ばかりか、その効果すなわち排泄物についてもモンテーニュ自身およびその秘書は詳しく記述している。『随想録』の最終章「子供がその父に似ることについて」は、病を得てから書かれたものであり、自らの病氣や寿命の他に、自身が巡った温泉地についても記している。彼は医学や医者に対してはすこぶる懐疑的であったが、湯治だけは例外であった。

まったくわたしは一般的にも入浴を健康上によいことだと思うし、昔はほとんどすべての民族の間に一般に守られており、今でもなお多くの地方で守られている。この毎日体を洗うという習慣を失ったために、我々は健康上少なからぬ損害をこうむっていると、信じているのである。それにこんなに五体を垢で掩い、あぶらでふさいでおくことが、体にわるくないとはどうい考えられないのである²⁷。

モンテーニュは湯治に特別な効能があるとは信じていなかったものの、少なくとも入浴に対しては肯定的な意見を持っていたことは確かである。

1-4. 水浴から入浴の復活

不思議なことに水は湯のように危険だとはみなされていなかった。人々は川で水浴することについては比較的抵抗がなかった。室内での入浴をあれだけ避けていたアンリ4世やルイ14世は泳ぎが得意だったと言われ、セーヌ川では王族ばかりか多くの人々が泳いだので、1688年には更衣所を設け肌着とタオルを貸し出す者さえもあらわれた²⁸。医師たちは、

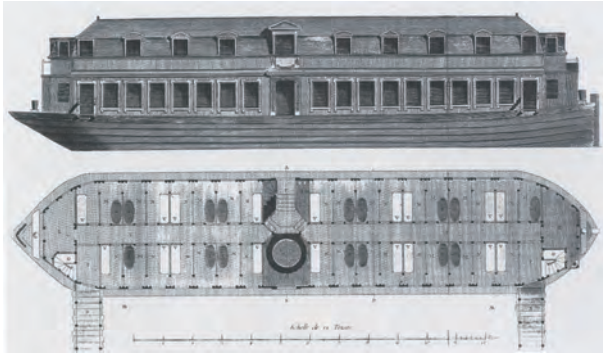


図7 パリの浴場船、木版画挿絵、1765年

「冷水浴の効用」を主張し始めた²⁹¹。ウィーンでは1633年、1543年、1711年にドナウ川での水浴に対して、病気になる、あるいは危険だという理由で禁止令が出たほどで、人々がいかに水浴を行っていたということがわかる³⁰。次のステップは「浴場船」の発明であった。1760年に、フランス王ルイ14世の王室付き浴室役であったジャン＝ジャック・ポアチヴァンは王から許可を得て、2艘の浴場船を造船するための費用を受け取った。その船には男女のために浴室があり、ベッドも設えられていた³¹（図7）。図では、中央から左が女性用、右が男性用となっている。浴場船はまたたく間に広まり、フランクフルト・アム・メイン、マンハイム、ウィーンでも運航していた。マリー・アントワネット王妃も傾倒していたというルソーの『エミール、または教育について』（1762年）、あるいはデイドロやヴォルテールも「自然への回帰」を主張した。この主張を冷水浴者たちは受け入れ、入浴の習慣が復活していく。

ここで新たに登場してくるのが海水浴である。1750年にイギリスの医師リチャード・ラッセルがラテン語で出版した博士論文は2年後に『腺病への海水使用に関する論考』として英訳され10年で5版を重ねたが、そこでは海水を飲んだり、海に浸かったり、そこで泳いだりすることが奨励されている³²。飲水を除けば現代のタラソセラピーの走りともいえる。ラッセルが家を構えたブライトンが最初の海水浴地となってイギリス各地に広まると、それはドイツにも波及した。とはいえ、川と違って海は長く恐怖の対象だった。海に対する人々の態度の変化は、

エドモンド・パークが1756年に上梓した『崇高の美の観念の起源』に少なからず負っている。それは山と同様に近づきたいものにこそ崇高さがあるという主張であった³³。

18世紀以降になると、ヨーロッパに暖かい風呂も再登場する。まず、中世以来続いてきた治療のための風呂が現れ、それにはロシアから伝わった「白いバナヤ」とイスラームの「ハムマム」があった。ロシア式の風呂は、とくに1815年にナポレオンがワーテルローの戦いに敗れ、ロシア軍がドイツに進出した時に、この地にロシア式の風呂を建設したことが、ひとつのきっかけとなった。イスラーム式の風呂は、早くから知られ裕福な商人が自宅に作っていた。コンスタンチノーブルのイギリス大使館に勤めた経験のあるデイヴィッド・アーカートは、その優秀さを認め、イギリスに普及させようと努力した。彼は、東洋への憧れという単なるオリエンタリズムからではなく、都市労働者のための風呂を建造しようとし、1856年によく治療用の風呂が実現した。これが後のヨーロッパやアメリカ合衆国のハムマムの原型となる³⁴。

とはいえ、これらのロシア式、イスラーム式の風呂が広く普及することはなかった。それに代わって、さまざまかたちの風呂が登場した。尻を洗うヒップ・バスあるいはシッツ・バス³⁵。金盥の中でスポンジを使って洗うスポンジ・バス³⁶。下から水が噴き出すファウンテン・バス等々である³⁷。

産業革命によって都市の人口が増加するにつれ、共同浴場も再び建造されるようになった。それは、家庭に浴槽を持つことのできる富裕層ではなく、大多数の労働者のためのものだった。1842年にリヴァプールに開業した共同浴場がその最初である。男女分かれて28の浴室があり、そのうち6室にシャワーが備え付けられていた。さらにそこにふたつの小さな浴槽があった。そこでは洗濯も行われた³⁸。1817年には水泳がプロイセン軍の必修教練となり、共同浴場はプロイセンをはじめとしてドイツ帝国全体に広まっていった³⁸。とはいえ、タオルや石鹸を含む入浴料はまだ大衆にとっては高すぎたので、1900年

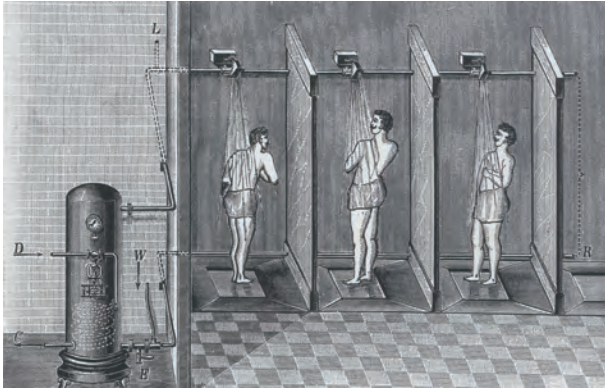


図8 シャワーの共同浴場、1905年

頃にはシャワーのみの共同浴場が広まった(図8)。1908年のパリでは、153,285人がシャワーの共同浴場を使用し、その半数は女性だった⁴⁰。公共浴場ができて、しばらくの間はもっぱら男性が入浴していたことを考えると、この数字はいかに広く入浴の習慣が広まったかを示すものだろう。

ホテルは浴室の近代化の先例であり、19世紀半ばには浴室は寝室に付随するという考えが普及していた。そこに水洗トイレと洗面所が組み合わされるようになる。初めて各部屋に浴室と水道が付けられたのは、1853年にニュージャージー州のケープ・メイに建造されたマウント・バーノン・ホテルであった。現代のようなコンパクトな浴室が定型化するのにはアメリカ合衆国の1920年代で、それが集合住宅居に導入され、ホテルを通して世界中に広まっていった⁴¹。

註

- 1 日本人と入浴、あるいは日本の風呂については、多くの文献がある。本稿で主に参照したのは、松平誠『入浴の解体新書』小学館、1997年、筒井功『風呂と日本人』文春新書、2008年、中野明『裸はいつから恥ずかしくなったか「裸体」の日本近代史』ちくま文庫、2016年。また日本を含む世界の風呂、その風習については、吉田集而『風呂とエクスタシー 入浴の文化人類学』平凡社、1995年、キャスリン・アシェンバーク『図説 不潔の歴史』鎌田衍月訳、原書房、2008年、山内昶・山内彰『風呂の文化誌』文化科学高等研究院出版局、2011年。
- 2 ヤマザキ・マリ「テルマエ・ロマエ」『コミックビーム』エンターブレイン、2008年2月-2013年8月、単行本、エン

ターブレイン、2009年11月-2013年6月。アニメ化、ゲーム化、映画化された。

- 3 吉田は、アンデスのインディオたちは一生風呂に入らないと述べている。吉田、前掲書、10-11頁、またチベット人は風呂に入らないという言説に対して、筒井はこれを否定している。筒井、前掲書、273-275頁。
- 4 それをつけていない者はヘタイラ(娼婦)あるいは、非市民の女と見做された。山内、前掲書、188頁。
- 5 アシェンバーク、前掲書、26頁。実際著者の友人のドイツ人男性は、肌寒い季節でも冷水のシャワーを浴びると自慢気に話していたので、この意識は確かにあるのだろう。イギリスにはこの名をつけたポスト・パンクバンドが活躍しており、自虐的なネーミングといえる。
- 6 「バルネア」と「テルマエ」の違いを、吉田は「バルネア」が風呂の上位概念であり、市や州が管理している記念碑的な建物である公共風呂「テルマエ」はその特殊形であるとしている。吉田、前掲書、89頁。
- 7 世界遺産「ローマ歴史地区、教皇領とサン・パオロ・フオーリ・レ・ムーラ大聖堂」の一部。
- 8 アシェンバーク、前掲書、33頁。
- 9 トルコ語の「ハムマムhamam」は、「温める」「熱する」を意味するアラビア語の動詞「ハンマ」に由来する。
- 10 ヨーロッパ中世以降の風呂について、文化人類学の吉田、山内の著作は、奇妙なことにほんのわずかしか頁を割いていない。しかし中世からルネサンスにかけて共同浴場や宮廷の風呂は多く存在していた。中世の水と入浴のシンボリズムとイメージについての多角的な研究は、池上俊一『ヨーロッパ中世の想像界』名古屋出版会、2020年、とくに第Ⅱ部2「水—水浴と温泉のイメージ」、252-286頁。キリスト教における洗礼や水のシンボリズムについては、保井亜弓「入浴図をともなう悲しみの泉」『金沢美術工芸大学紀要』第64号、2020年、39-54頁参照。
- 11 アシェンバーク、前掲書、51-54頁。
- 12 池上、前掲書、256頁。
- 13 アシェンバーク、前掲書、76頁。
- 14 同上書、77頁。
- 15 バーゼルの旧市街の中ほどにあるバーゼル大学薬学博物館の建物は、初期の出版において手広く商売したことで知られる当地の出版者で、彼から始まるその一家のコレクションでも有名なヨハネス・アマーバッハが1508年から住み、その後はヨハネス・フロビウスやロツテルダムのエラスムスも住んだ家として有名だが、その昔は共同浴場であり、すでに1316年には記録が残っている。ティロル地方の公共風呂については、Robert Bücher, *Im städtischen Bad vor 500 Jahren: Badhaus, Bader und Badegäste im alten Tirol*, Wien, 2014.
- 16 ポッジョ・ブラッチョリーニについては、ステイーヴン・グリーンブラット『1417年、その一冊がすべてを変えた』河野純治訳、柏書房、2012年。ポッジョの手紙のドイツ語

- 訳は、Hans Jörg Schweizer (trans.), *Über die Bäder zu Baden : ein Brief von Poggio Bracciolini aus Baden im Mai 1416*, <http://doi.org/10.5169/seals-630402>
- 17 15、16世紀の宮殿の浴室はほとんど現存していない。貴重な現存例としては、規模は小さいものの、インスブルックのアムプラス城に浴室が残っている。保井亜弓「フィリッピネ・ヴェルザーの浴室」『金沢美術工芸大学紀要』63号、2019年、71-82頁参照。近世ヨーロッパにおける宮殿に設えられた浴室については、Kristina Deutsch, Claudia Echinger-Maurach and Eva-Bettina Krems (Eds.), *Höfische Bäder in der frühen Neuzeit: Gestalt und Funktion*, Berlin/Boston, 2017.
- 18 田中久美子『フォンテーヌブローの饗宴 イタリア・マニエリスムからフランス美術の官能世界へ』ありな書房、2017年、とくに第2章「フランソワ1世の〈浴室の間〉ギャラリー」、63-120頁。Claudia Echinger-Maurach, “Mona Lisa im Bade” : Das Apartment des bains in Schloss Fontainebleau, Echinger-Maurach and Krems (Eds.), op.cit., pp. 263-286.
- 19 Diane Wolfthal, *In and Out of the Martial Bed: Seeing Sex in Renaissance Europe*, New Haven/London, 2010, p.130.
- 20 Jeremie Charles Korta, *The Aesthetics of Discovery: Text, Image, and the Performance of Knowledge in the Early-Modern Book*. Doctoral dissertation, Harvard University, Graduate School of Arts & Sciences, 2015, pp. 143-148, <http://nrs.harvard.edu/urn-3:HUL.InstRepos:17467521>
- 21 この版画は失われたペンニの素描、あるいはヴァザーリが『芸術家列伝』(1568年)のジャンフランチェスコ〔ペンニ〕伝に記している、彼の素描帖にあるという同様の作品に基づくとされている。Catherine Jenkins, *Prints at the Court of Fontainebleau:c.1542-47*, Oudekerk aan den IJssel, 2018, vol. 1, p. 316; 森田義之他監修『ヴァザーリ芸術家列伝』第三巻、中央公論美術出版社、2015年、333頁。
- 22 アシェンバーク、前掲書、89-90頁。
- 23 山内、前掲書、213頁。
- 24 アシェンバーク、前掲書、102頁。
- 25 『モンテニュー旅日記』(モンテニュー全集8) 関根秀雄、斎藤広信訳、白水社、1983年。
- 26 この温泉は2000年以上の歴史を持ち、ジョセフィーヌ妃、ベルリオーズ、シューマン、ドラクロワらもそこを訪れたという。同上書、300頁。
- 27 『モンテニュー随想録5』(モンテニュー全集5) 関根秀雄訳、白水社、1983年、312頁。
- 28 アシェンバーク、前掲書、108-110頁。
- 29 哲学者であり医者でもあったジョン・ロックが1693年に出版した論文『教育に関する考察』をはじめとしてとりわけイギリスではこうした啓蒙書が出された。同上書、124-127頁。
- 30 Bücher, op. cit., p. 58.
- 31 Ibid.
- 32 アシェンバーク、前掲書、127-128頁。
- 33 海への恐れとその有用性の主張との相克を経て、海辺がリゾートになる過程は、アラン・コルバン『海辺の誕生：海と人間の系譜学』福井和美訳、藤原書店、1992年参照。
- 34 吉田、前掲書、118-119頁。
- 35 「シツ・バスsitz bath」は英語であるが、ドイツ語のSitzbad、すなわち座るsitzenと入浴Badに由来する。
- 36 スポンジ・バスはイギリスでは「フランス式入浴」、フランスでは「イギリス式洗浄」と呼ばれた。アシェンバーク、前掲書、185頁。
- 37 吉田、前掲書、120-123頁。
- 38 Bücher, op. cit., p. 63.
- 39 アシェンバーク、前掲書、172-173頁。アシェンバークによれば、ドイツではイギリスと異なって富裕層も共同浴場へ行き、そのため浴場は比較的豪華な造りであった。
- 40 Bücher, op. cit., p. 63-64.
- 41 吉田、前掲書、124-125頁。

図版出典

図1、https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Rom_Caracalla-Thermen_von_S%C3%BCden.JPG ; 図2、[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Maquette_des_thermes_de_Diocletien_\(mus%C3%A9_de_la_civilisation_romaine,_Rome\)__\(5911812792\).jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Maquette_des_thermes_de_Diocletien_(mus%C3%A9_de_la_civilisation_romaine,_Rome)__(5911812792).jpg) ; 図3、Johannes Stumpf, *Gemeiner loblicher Eydgnoschafft Stetten, Landen und Völckeren Chronick wirdiger Thaaten Beschreybung*, Zürich, 1548. キャスリン・アシェンバーク『図説 不潔の歴史』鎌田徃月訳、原書房、2008年、78頁 ; 図4、Claudia Echinger-Maurach, “Mona Lisa im Bade” : Das Apartment des bains in Schloss Fontainebleau, Kristina Deutsch, Claudia Echinger-Maurach and Eva-Bettina Krems (Eds.), *Höfische Bäder in der frühen Neuzeit: Gestalt und Funktion*, Berlin/Boston, 2017, fig. 3 ; 図5、Illustration of *Hypnerotomachia ou Discours du Songe de Poliphile*, Jeremie Charles Korta, *The Aesthetics of Discovery: Text, Image, and the Performance of Knowledge in the Early-Modern Book*. Doctoral dissertation, Harvard University, Graduate School of Arts & Sciences, 2015, fig., 3-18, <http://nrs.harvard.edu/urn-3:HUL.InstRepos:1746> ;

図 6、Catherine Jenkins, *Prints at the Court of Fontainebleau: c.1542-47*, Oudekerk aan den IJssel, 2018, vol. 1, p. 317; 図 7、デイドロ・ダランベール『百科全書』「鬘屋」挿絵、Robert Bücher, *Im städtischen Bad vor 500 Jahren: Badhaus, Bader und Badegäste im alten Tirol*, Wien, 2014, fig., 39; 図 8、Ibid., fig., 45.

(やすい・あゆみ 芸術学／西洋美術史)
(2020年11月5日 受理)